

No. 878

# 子供たちにこの島を

すすきが、秋の陽に照らされ、心地良い風に揺れている。(野菊が咲きみだれ、おせいバラの花が開き、ツバキの赤いつばみがふくらんでいる)

ムクドリ、紅スズメ、キジバトの野鳥が自由に飛び交い、赤トンボが子供達の頭上を舞う公園。

自然に囲まれた子供達の遊び場天国が東京の真中にある。

竹芝棧橋からおよそ1kmの東京湾に浮かぶ緑の小島「第三台場」である。ペリーの来航で江戸幕府があわてて構築した砲台の跡だ。

世が明けてから100年余り、忘れられてきたこの島が、戦後、小金さん親子の献身的な努力で緑につつまれた公園になった。史跡公園に指定したっきり、荒れるにまかせたお役所に代わって、二人は雑草を刈り、木を植え、島に花を咲かせた。

今、砲台跡のこの島は、遊び場がだんだん減っていく東京の子供達が、自然の中で思いきり飛びはねるのを待っている。小金さんも、その日を夢みて島の手入れに余念がない。

## 重　　い　　青　　春

慌ただしい一日の朝、明子ちゃんは学校へ行く準備に追われる。そして、お父さん、お母さんは、更に忙しい朝を迎える。明子ちゃんの準備を手伝わなくてはならないからだ。

明子ちゃんから歩く力を奪った、昭和30年の不幸なトップ・ニュース、それは130人の命を奪い1200余人の患者を出した、俗に森永ドライミルク砒素中毒事件と言われる。両下肢弛緩性マヒ、元気な赤ちゃんだった明子ちゃんにとっては余りにも過酷な運命だった。だが、今日も元気に学校に通う明子ちゃん、父親の年晃さんは毎日堺市の養護学校まで車で送り迎えする。そこには重い十字架を背負った人間の暗さはない。力強い生命の息吹と、親と子の暖かい心の触れ合いがあるだけだ。